

自然との関わりを通して感じる心を育てる

—子どもを取り巻く絵本環境からの一考察—

Child Development and Natural Surroundings

—what children learn from picture books—

谷川 賀苗

Kanae Tanigawa

1. はじめに

幼児期は、周りの人やものの環境とのかかわりのなかで、直接経験によって獲得した具体的認識の蓄積が必要な時期である。自らを取り巻く社会環境について、周りから強制されるのではなく、自ら感じる心を主体的な活動・行動を通して内在化してゆく。この「感じる心」を幼児期に蓄積することにより感性が研ぎ澄まされ、まわりの人や対象との関係性を結ぶ基礎となり、生きる力の原動力になるのではないだろうか。

とりわけ、都市部に生活する子どもたちの社会・生活環境に着眼すると、子どもたちは、果たして主体的に感じる心を育てているだろうか。テレビやゲームというメディアの過激な刺激、自然と直接触れ合うことの減少、少子化による子ども集団遊びの難しさなど、子どもを取り巻く社会環境は、子どもが積極的に感じる心を育むという視点からはあまり歓迎される状況ではない。

本研究では、幼児の生活から自然が失われているといわれている状況において、まだ自然を残している、あるいはこのような幼児を取り巻く社会環境の悪化現象を深く受け止め、すこしでも望ましい環境づくりに努める保育園の施設において実施されている、園の菜園で野菜栽培活動に関わるプログラムを事例研究のフィールドに取り上げる。園の菜園で四季を通じて野菜が栽培され、この活動について子どもたちも毎日の保育時間の中で積極的に関わられるようにプログラムが考えられている。子どもが自然との関わりを通して、自分の世界を育み、その気持ちを表現する言葉を養ってゆく過程について注目する。子どもが自分の世界を広げ、深めてゆくとき、そのことを表現する生きた言葉をどのように内在化してゆくかについては、一人一人の子どもについて、発達を観察・記録し、それらを整理・分析することによって少しずつ明らかになっていくと考えられる。幼児期にいかに関言葉の種まきを行うかが、その後の発達にどのように影響するかという視点から研究は注目されつつあるテーマであるが、日々、子どもの発達を見守り、支援する保育者たちは、実践を通してこのことの大切さと、重大さを感じている。子どもを取り巻く社会が、子どもの生きる力に繋がるメッセージを発信しているか疑問を持たざるを得ない状況におい

て、保育現場との連携で「子どもの生きる力を育てる環境づくり」について考え、取り組むことは重要なことだと考えられる、幼児期に続く、児童期、青年期に芽が出始めるさまざまな問題とも少なからず関係していることを今一度認識し、言葉の種まきができる幼児期に、自然とのふれあいを通して、感じる心を養うという視点から研究することが重要である

幼児期の子どもたちを対象とした研究で、今回は、とりわけ自然と関わったことを子どもが言葉を用いて表現すること、表現できることの可能性を絵本というツールを導入することにより考えてみる。本研究では、幼児期の絵本との出会いを、言語習得、早期教育という狭い意味での絵本の力を超えて、子どもの発達にさまざまな可能性を提示してくれるツールの一つと捉える。今回は、園児が食育活動の一環として取り組む夏野菜の栽培に関連する絵本を保育者が、栽培している野菜の成長に合わせながら意識的に保育現場に読み聞かせを取り入れることにより、このことが子どもの心の育みとどのように関係づけられるのかを考える。子どもは自らが苗植えや種まきから栽培活動にかかわり、毎日本水をあげるなどの栽培活動を通して、感じたこと、驚いたこと、感動したこと、発見したがある。絵本は、このような感情の発達について、どのようなことができる可能性をもつのだろうか。絵本を通して、新しい言葉に出会い、言語を習得してゆくのは自明のことであるが、さらに絵本に描かれる絵、語られる物語について味わうこと、登場人物と共鳴したり共感したりすること、絵本を読んで感じたことを身近で世話をしてくれる人に伝えることにより人間関係のつむぎ方を学ぶなど、生きる力を自己の中に蓄積してゆく。表現する言葉を発達させてゆくと考えられる。本研究では、絵本の読み聞かせの効果を言語の習得といった狭義にとらえるのではなく、絵本を通して、そこに描かれる絵、語られるお話を子どもが実際の体験と重なり合わせたときに、どのように子どもの心に内在化するのかという広義の意味での絵本の魅力、子どもの発達への効果、子どもが世界を広げるときのツールとして考える。子どもが自然と触れ合うこと、積極的に自然と向き合う状況において、絵本がどのように子どもの世界の育みと関われるか、貢献できるかという視点を深めてゆきたい。

2. 子どもにとって絵本とは何か

子どもにとって絵本とは何かについて、佐々木 (1993) は、遊びの中のひとつと位置づける。しかしながら、他の遊びと一線を引くものとして、手足を自由に使って、直接に物や人 (友達) に働きかけるのではなく、基本的には頭の中でのみ集中的に遂行される心理・意識レベルの活動と考える。子どもが絵本を読む (見る) ことは、心理機能の視点から少なくとも考えられることは、たいへん高度な認識活動であるということである。子どもが絵本と出会うことにより、子どもを取り巻く生活環境の中で育まれた、遊びやさまざまな体験、経験から得たものを確かめたり、深めたり、広げたり、また意味づけたりするために大変重要な役割を果たすと考えられる。

現代社会において、大人のみならず子どもが置かれている生活環境は、視聴覚を通しての刺激

があふれ、さらによりこの刺激が強く、深くなる傾向にある。メディアの利点を必ずしも否定することはできないが、とりわけ子どもの発達とメディアの影響を考える場合、子どもが直接体験から学ぶということは、「虚」の世界において学びとは比較にならないくらい重要なのではないだろうか。

幼児期において、とりわけ身近に世話をしてくれる大人との直接的コミュニケーション、感情の交流は、基本的な信頼関係を築く基礎になると思われる。絵本についても、子どもが絵本を楽しむ前提に、身近な大人との信頼関係がまず形成されているがゆえに、絵本の中に描かれた絵、語られた内容が心に落ち着き、絵本を楽しむことができると思われる。

子どもが絵本と関わることについて、田代（2008）は、絵本の発達心理学研究を中心に最近三年間の動向をレビューしている。とりわけ、本研究のテーマである幼児の絵本環境については、質問調査を実施した谷川（2005）、一歳半の子どもに母親が絵本の読み聞かせを行う時に情緒的な機能を重視する傾向があると報告する村瀬（2006）、母親が絵本を子どもに読み聞かせる状況においてどのようなことを期待するかをまとめた石川（2005）を取り上げている。絵本が子どもにとって喜びとたのしみそのものでなければならない（松居、1995）の言葉を引用することにより、子どもが絵本と出会う場面、絵本の内容を楽しむという認識面のみならず、子どもの情緒面について十分注目した研究の広がり期待している。

3. 幼児の自然を感じる心を育てる～絵本の読み聞かせを通した表現活動からの試み

日々、子どもは、保育園において、保育者、友だちとふれあい、と同時に園庭、近隣の地域への散歩などを通して自然とふれあっている。この時期の子どもには、探究心、好奇心が芽生えはじめ、自らが動き回ることによって回りから刺激を受け、遊びに展開しながら、周りの環境と関わっている。子どもは、このような自発的な活動を通して、幼い心に感じたことについて、表現したいという気持ちになる。そして、子どもは、これまで自らの中に培われた表現手段・方法を総動員して、自分が感じたことを周りの保育者や友だちに伝え、感じたことに共感を求める経験を蓄積させながら、さまざまな場面で自らが獲得した「感じる心」を内面に刻み、幼い心を耕していく。

幼児期において、子どもが自分の内側にあるなにもものを何らかの形で表そうとすると、かならずそれを受け止めてくれる人の存在が必要となる。とりわけ、この時期の子どもが内面を表す方法として、言葉を用いた表現という方法と、また、年齢が低い、もしくは自らが感じた表現についてうまくそのことを表す言葉を持たなかった場合、表現以前の表出という必ずしも言葉を使用しない（できない）方法で、他者に共感を求める。

子どもが自ら感じたことを、表現あるいは表出のいずれの方法であれ、周りに伝えたいというコミュニケーション能力を豊かにするさまざまな方法の一つに絵本が考えられる。例えば、

子どもが具体的に自然と触れ合った活動と関連する絵本を保育者が読み聞かせることにより、子どもは感じたことについて、そのことをいかに表現できるきっかけをみいだす可能性も考えられる。あるいは、必ずしも自らが感じたことを言葉で表現することがなくても、感じることをいかに表出できるかについて、子どもの目線で考えるのではないだろうか。

今回のフィールド研究では、子どもが自然と関わったことから感じたことを自分なりに表現・表出する場合に、関連する絵本の読み聞かせを保育者が積極的に保育時間に取り入れることにより、子どもたちが、絵本の絵、ことばに出会うきっかけになり、それにより、豊かな感性や表現する力を養い上げるのではないかとということを取り上げる。具体的な読み聞かせ活動については、主として観察法を用いて検討する。

4. パイロット研究

① 目的

M園が実施する食育プログラム「夏野菜の栽培活動」を観察対象とし、園児たちが園庭の菜園で夏野菜の苗植えをし、苗の生育を見守りお世話活動として水やり、みごとにできた夏野菜を収穫し、自分たちで調理し、いただくという一連の活動とこの活動に関連した「食」絵本を読み聞かせを実施し、子どもたちが体験したことを内在化してゆくか、特に子どもたちの発語・つぶやき、保育者とのやり取りに着眼することから考える。

絵本をツールとしていろいろなプログラムの展開が可能であるが、今回の食育プログラムの中では、主として「食」絵本を、進行する時間の流れの中で、下記に記録を載せたように夏野菜の栽培活動中に「絵本の読み聞かせ」として実施された。

② フィールドについて

今回のパイロット研究に協力して下った保育園は、平成 14 年に設立した、大阪市東部の商業地域と住宅地域が混在している T 区にある。日々の保育において、園児たちの行動観察から、姿勢の悪さ、身体の動きがぎこちない、排便の時間が定まらない、食が細いなどという子どもたちの現状が浮かび上がり、生活リズムの核となる、「食」を研究テーマに取り上げたり、園から徒歩 1 分以内で行くことができる場所に畑を作り、子どもたちが菜園活動に関われるプログラムを実施している。

③ きゅうりの栽培と絵本のかかわりについての事例

- 1) 対象園児～年少クラス (かぜ組 24 人)
- 2) 用いられた絵本～かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり (田中友佳子 絵・文、徳間書店)
- 3) 観察日時 2009 年 5 月～2009 年 7 月

<きゅうりの苗植え>

5月上旬

年少「かぜ組」のパンダチームとパイナップルチームの子どもたちは、自分たちの出たすぐの園庭で、2009年5月からきゅうりの栽培活動を行った。



<栽培活動～当番を決めて水やり活動>

苗植えのあと、きゅうりの苗が太陽の光を受けてぐんぐん成長することができるように、当番を決めて水をやるという栽培活動に関わることができた。

<絵本の読み聞かせときゅうりの収穫～かっぱのかっぺいと大きなきゅうり>

6月下旬

このようなお世話活動を通して、自分たちが育てたきゅうりが日々の保育時間の中でみごとに育ってゆく。きゅうりが2本ほど育った日（2009年6月26日）午前中はきゅうりの収穫活動に当てられた。担任のK先生は、きゅうりの収穫活動の前に、これから行う活動の説明、その後すぐ活動に関連する絵本の読み聞かせを行った。

『かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり』（田中友佳子 文・絵 徳間書店）では、日照り続きで、食べ物がなくなり、おなかをぺこぺこにすかせたかっぱのかっぺいが主人公として登場。

きゅうりが大好物であるかっぱのかっぺいは、ある時、大きなきゅうりを運ぶ不思議なおじいさんを見かける。かっぺいは、そのきゅうりが食べたくて、急いで後を追うことになる。しかし、大好物のきゅうりを運ぶおじいさんの姿をなかなか見つけることができない。かっぺいはきゅうりを追いかけてながら、きゅうりに似たいろいろなものに出会うことになる。きゅうりに似たサボテン、きゅうりに似たワニ、そして、きゅうりに似たきょうりゅうのしっぽ。かっぺいは簡単には大好物のきゅうりを運ぶおじいさんを見つけてはできないが、諦めることなく元気を出して、どんどん歩を進める。「こんどこそぜったいきゅうり」と思い、いきおいよくかぶりついたのは、きゅうりのしっぽ。しっぽに突然かぶりつかれたきょうりゅうは驚き、かぶりつかれたしっぽをひとふり。しっぽの上をいたかっぱのかっぺいは、空高く飛ばされてしまった。このかっぺいが空の上でひっかかったのが太いつる。とにかくこのつるをのぼると、なんとほんもののおおきなおおきなきゅうりが実り、おじいさんがにこにこして立っていた。このおじいさんは天の畑できゅうりをつくっているきゅうりじじいだった。かっぱのかっぺいは、その時ちょうど腰を痛めていたきゅうりじじいにかわって、みごとに成長したきゅうりを斧を使って一本一本切り離した。かっぺいの助けのお陰でこれから 1 年分の漬物用のきゅうりができたきゅうりじじいは大喜び。きゅうりの収穫を手伝ったかっぺいは、みずみずしいおおきなきゅうりを、おなかいっぱいごちそうになった。

この絵本を担当の K 先生から読んでもらっている年少クラスの子どもたちの発語やつぶやきは次のようなものであった。実線は、先生もしくはかぜ組クラスの園児の発語やつぶやき、斜線は、絵本の文章として表した。

絵本の読み聞かせの日時 : 2009 年 6 月 26 日 金曜日 10 時～ 年少 かぜ組クラス

絵本のタイトル：かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり

<絵本の読み聞かせ風景>

K 先生：これから先生が絵本を読みます。

かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり
あるところに かっぱのこどもが すんでいました。
なまえを かっぺいと いいました。

園児：かっぺい かっぺい

先生：そう、かっぺい



先生：わかる？

園児：きゅうり

先生：「もしかしたら、きゅうりかな。よし、とにかく、このつるをのぼってみよう」

みんな知っているもんな

園児：うん



先生：だって、お水あげてるしな

ちっちゃいのもおっきいのも見たしな

先生：くものうえに たどりつくと、そこには。。。。。。

しごとがおわると おじいさんがいいました

「ほんとうにありがとう。おかげでいちねんぶんのきゅうりのつけものが
つくれるわい。さあ、すきなだけたべなされ」

園児：(かっぺいがおおいしそうに大好物のきゅうりにかぶりつく絵を見ながら)
うまい！

先生：かっぺいはみずみずしいおおきなきゅうりを、おなかいっぱいごちそうになりました。
おしまい

先生：みんなのきゅうりとちがっていた

園児：いっしょだった
絵本のきゅうりのほうがちっちゃかった

この日、かぜ組の園児たちは、はじめて『かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり』を担当のK先生から読みきかせてもらった。きゅうりが大好物というかっぱのかっぺいは、きゅうりが大好きな園児たちにとって、すぐに受け入れられた絵本の主人公のようで、次のページでは、どのようにお話が展開してゆくのか興味深く絵本を見入っていた。かっぱのかっぺいがきゅうりを求めて旅を進める途中、きゅうりに似たものが次々に登場するページでは、わくわくする気持ちから自然と園児たちの発語が導き出された。自分が考えるものがそのページに果たして描かれるかということはドキドキする、待ち遠しいようだった。きょうりゆうに飛ばされてかっぺいが空の上で何かに引っかかったページでは、園児が菜園で観察したきゅうりの葉っぱが描かれており、すぐそれは発語として表現された。スーパーに並んでいるだけでは想像できないきゅうりの葉っぱ、菜園活動を通して、直接体験から学んだことがしっかり園児のなかに入っていることが伺えた。絵本を読み終えた先生の問いかけにより、絵本に描かれていたみごとなきゅうりと園児たちが園庭で育てたきゅうりの大きさを比較する場面では、誇らしげに自分たちもかっぺいがおいしそうに食べていたきゅうりを育てたということを発語していた。

かっぱのかっぺいとおおきなきゅうりの絵本の読み聞かせが終わると、先生からきゅうりの収穫活動の説明があり、園児たちは自分たちが育て、みごとに実をつけたきゅうりを収穫するために、教室を出て、すぐそばの「かぜ組」きゅうりがなる園庭へ移動した。

先生：こっちがパイナップルグループ、こっちがパンダグループ
きゅうり見えているかな
先生がはさみでぷちんしているかな



園児： おおきいきゅうりだね
すごい、すごい

先生： では、切りますよ。5, 4, 3, 2, 1 ぷっちん

園児： うわあすごい、大きいね

先生： さわってみて

園児： やわらかい
おっきいね。 とれとれ

先生： 何がついている。チクチクするね
さあ、教室に持って帰ってたべようね。

この後、担任の先生と園児たちは教室に戻り、収穫したみごとなきゅうりを、パイナップルチームとパンダチーム、それぞれのテーブルにまず置き、先生の指導の下、水を張ったボールの中で洗い、きゅうりのイボを先生に包丁の裏で取り除いてもらった。そして、まな板の上にきゅうりを置き、先生に適当な大きさに切り分けてもらい、収穫を喜び、感謝して園児たちはきゅうりをおやつに食べる。

5. 食育活動を通じて感じる心を育てる取り組みと今後の課題—絵本というツールの導入の効果の検討

今回実施した夏野菜を育てることと絵本の読み聞かせのパイロット研究から、今後検討されるべき課題について、考えてみたい。今回は、自然を身近に感じるという視点から、幼児が日ごろ食べている夏野菜を苗から育て、水やりなどに関わることで命を育むという体験をし、そしてみごとに実ったきゅうりを感謝していただくというプログラムの流れの中に、保育者の協力を得て、きゅうりに関連した絵本の読み聞かせプログラムの導入を試みた。幼児たちは、日ごろスーパーで見たり、食事として出てくるきゅうりの苗を自分たちが毎日一定の時間を過ごす保育園の園庭に植え、これからどうなるのかなという不思議に出逢う。担任の先生やクラスのお友達とこれから苗がどのように成長するのかわくわくしながら話をする。そして、苗が成長するためには、太陽の力とお水がたいせつであるということを先生から教えてもらうと、当番を決め、毎日たっぷりの水をやるという活動にかかわるようになる。夏に向ってまわりがどんどん暑くなり、太陽のエネルギーとお水をたっぷりもらったきゅうりは、みごとな実をつけることになる。『どうなるのかな』という不思議から関わりがスタートし、苗に毎日欠かさずお水をあげるという役割行動を達成し、キュウリが成長する過程を毎日観察することにより、きゅうりの葉の形や、花の付き方を実際に観察を通して、驚きながら学び、結果として成った見事なきゅうりに感動し、そして、もぎたてをチクチクする部分をお塩でモム体験をし、感謝してきゅうりをおやつに食べる。このようなきゅうりと命の育みを通して関わることを通して、担任の先生や友達との共感、喜びを共有できる。

今回のプログラムについて、全体を通して見ると、幼児にとって自然と関われる環境が身近にあること、そして、夏野菜を植えて水やりを通して育てるという積極的な関わりは、どのようなかたちで子どもたちの中に位置づけられているか、絵本の読み聞かせの風景を観察することからわずかではあるが理解する糸口がつかめた。

園児たちは、日ごろ見ているきゅうりが、苗のときどのようなものか生まれて初めて出会い、これからこの苗がどのようになってゆくのか『わくわくしたり、今よりも少し先を考える待ち遠しい』感情を抱く。そして、太陽のエネルギーとたっぷりの水を注がれた苗がすくすく成長する過程を見守ることにより、命の育みに感動を覚え、さらにきゅうりの葉が成長するプロセス、ど

のような花さき、その部分が実になってゆくか、毎日の保育園での生活時間の中で確かめてゆく。この園児たちの観察したことは、担任の先生が初めて読んでくれた『かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり』の読み聞かせ時間のなかで、園児たちの読み聞かせをしてもらっている時間の様子や絵本のお話とそれに沿った絵を見た時に発せられる言葉、つぶやきからわずかではあるか、掬いあげ、園児たちの体験の意味づけの視点から考えを深める可能性があると考えられる。

まず、第一に、絵本の見開きに描かれたきゅうりの絵から、身近に育てているきゅうりが絵本のなかでどのようなお話になってゆくのだろうと、静かに先生が読んでくれる絵本に耳を傾け、かっぱが登場し、そのかっぱの名前がかっぺいと知ると、愛らしいかっぺいの絵が身近に感じるのか、園児が口々に『かっぺい、かっぺい』と絵本に親密感を板き始める。お話が展開してゆくようすを静かに耳を傾けることで味わい、後半のページで見事なきゅうりと葉が登場すると、静けさから急にクラスが元気づき、園児たちは自分たちの育てた大切なきゅうりと絵本に描かれたきゅうりを楽しそうに比較し始める。この段階で、園児たちにとって、きゅうりの葉は、栽培前のように見たこともないものではなく、毎日どんどん花を咲かせてゆく成長を楽しむきゅうりの葉として、内面に認識されまた意味づけられていると考えられる。

今回は、園児が保育時間の中で体験したことを、どのように家庭において身近な大人に伝えようとしているか、家庭において身近に感じている自然を絵本のなかでまた味わうという読み聞かせがどの程度行われたかなどについて、パイロット研究のレベルから研究構想を広げ、調査を実施することはできなかった。今回の研究から見出された知見を視野に入れ、これからの研究では、自然を育む心について、保育園の取組みの取組みが、園児の家庭での生活においてどの程度受け止められ、家庭における絵本の読み聞かせも一つのツールとして、子どもが体験を自らの内面に意味づけるサポートシステムを検討してゆきたい。

引用文献

- 石川由美子 2005 子どもの発達に対する絵本利用の効果に関する母親の期待、日本発達心理学会第 16 回大会論文集 P. 578.
- 松居直 1995 絵本・ことばのよろこび 日本基督教団出版局
- 村瀬俊樹 2006 日本発達心理学会第 17 回論文集 P. 252
- 佐々木宏子 1993 新版絵本と子どものころ JULA 出版局
- 田中友佳子 2006 かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり 徳間書店
- 谷川賀苗 2005 子どもの発達と絵本—子どもと絵本との出会いについての一考察 帝塚山学院大学人間文化学部研究年報 第 7 号 Pp. 41-59.
- 田代康子 2001 もっかい読んで！絵本をおもしろがる子どもの心理 ひとなる書房